様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３３２００３２

研究課題名（和文）美術史における転換期の諸相

研究課題名（英文）Aspects of turning points in history of art

研究代表者
根立　研介（Nedachi, Kensuke）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：１０３０３７９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　15,600,000円

研究成果の概要（和文）：美術史の転換期の問題は、何を強調するかで、美術史の語り方が大きく変わってくることもある。本研究は、従来美術史で語られてきた枠組みを再検討するための試みである。
　特に、大きな成果は、通常日本の古代末期に登場したとされてきた彫刻の和様の問題である。近年の日本史学の成果を取り入れると和様の成立は、中世初期とすることが可能かと思われ、和様は日本の中世期を貫く重要な様式であったことなどを明らかにした。また、この和様の成立には、中国の唐から宋への転換期の問題も深く関わることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： Talk of the history of art may turn big what the problem of the turning point of the history of art emphasizes. This study is a trial to reexamine the framework that has been talked about in history of art conventionally.
 Particularly, the big result is a problem of the Japanese sculputural style that has been told to have usually appeared in in the late ancient times in Japan. It was thought whether you could do the establishment of the Japanese sculputural style with an early medieval period when I adopted result of the recent Japanese historical study and clarified that the Japanese architectural style was an important style to go through period in the Japanese Middle Ages. In addition, for establishment of this Japanese architectural style, I clarified what the problem of turning points from Chinese Tang to Soong was concerned with deeply.

研究分野：人文学（日本美術史）

キーワード：転換期　時代区分　個人様式の変遷　時代様式　流派様式　古代　中世　近世

１．研究開始当初の背景

申請者は、長きに亘って日本彫刻史研究を行い、特に近年は、仏像等の制作者である仏師の研究に携わってきた。ところで、仏師の姿を通して造仏のあり方を見ていくと、古代、特に７世紀後半から８世紀にかけては官営工房を中心とする造仏が行われていた。そして、こうした官営工房の造仏のあり方は変容しながらも９世紀から１０世紀始め頃まで確認できる。しかしながら、１０世紀も末頃になると、大規模な私工房を構える仏師が登場するとともに、主要な仏師は社会的にはかなり位の高い僧侶に準ずる者として位置づけられ、以後中世に至るまで造仏はこうした性格の仏師によって行われることなった。そうすると、仏像制作者の問題から美術史の古代から中世の転換期の問題を考えてみると、従来日本美術史で行われてきたように、平安時代末期に画期があったと捉えるより、平安時代１０世紀後半頃に画期があるとみなす方が妥当なように思えてくる。この問題については、『日本中世の仏師と社会―運慶と慶派・七条仏師―』（塙書房、2006 年）で一部論じ、仏師論という観点であるが従来の日本美術史の転換期の捉え方や、時代区分のあり方に疑問を呈した。

この日本美術史の時代区分の問題は、単に仏師論に留まるわけではない。仏師のあり方が変化する平安中期に成立してくる美術様式である、いわゆる和様の問題は興味深い。和様は、古代美術の様式と一般的に考えられてきたが、こと彫刻の和様に関しては和様の終焉を通常の時代区分に従って平安末期とすることは問題があるように思われる。「鎌倉前期彫刻史における京都」（科学研究費補助金、基盤研究（Ｃ）（２）、平成１３～１５年度）の報告書で論じたように、京都などでは少なくとも鎌倉時代半ば頃まで、和様彫刻様式、すなわち定朝様の仏像が京都仏師によって造られ続け、さらに定朝様の仏像彫刻は変容しながらも中世や近世においても制作が続けられた事実がある。また、鎌倉時代の新様式とされる快慶の安阿弥様もある意味、和様彫刻を再解釈して発展したものと捉えることができる。

そうすると、和様が成立してくる平安時代半ばこそ美術史の大きな転換期であり、和様を古代の美術様式と捉えるよりも、中世の冒頭に誕生し、継承されていった美術様式と捉え直す必要が生じる。そして、このことは、われわれの和様に関する概念自体の見直しをも迫ることになるように思われ、美術史における転換期の問題を再検討する必要性に気づかされた。

さらに、美術史における転換期を見直す問題は、流派や芸術家個人の様式展開をどう理解するかの問題にも関わってくる。運慶の作風転換期をどこに置くかは、運慶様式をどのように捉えるかによって変化してくる。また、慶派様式の転換期は、運慶の登場と重ねるのが一般的な見解のように思えるが、鎌倉時代の彫刻様式の大成を運慶の嫡男湛慶とみなす見方もあり、そうすると慶派様式の転換期が問題になってくる。

このように、時代様式や流派様式、あるいは作家様式をめぐる転換期の問題を改めて問い直すことは、従来語られてきた美術史の展開、様式概念の見直しに通じるところがある。あるいは、むしろ美術史の新たな語りを行うための一つの手掛かりとして、美術史の転換期の再検討が必要であると思い至った次第である。

２．研究の目的

本「美術史における転換期の諸相」の研究は、従来美術史で語られてきた枠組みを再検討するための、一つの試みである。美術の転換期は何を強調するかで変わってくるが、転換期を明確化することにより、美術史の語り方は大きく変わってくるからである。例えば、通常日本古代末期に登場したとされる和様の美術は、実は中世以降も変容しながらも継承されている。このことに関して、和様が成立してくる１０世紀後半を美術史の転換期と捉え、その成立をもって中世とする時代区分を打ち立てれば、和様の概念把握が容易になり、美術史の語りも変わってくる。こうした、転換期の見直しの問題は、流派や画家、仏師などの問題についてもいえよう。美術史における様々な転換期を再考することにより、新たな美術史の語りを構築することが、本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者である根立研介、および研究分担者である中村俊春、同平川佳世が所属する京都大学文学研究科を拠点として遂行される。その他、日本美術史（彫刻史・絵画史、工芸史）、中国美術史、西洋絵画史の連携研究者９名が集い、共同研究を行った。これら計１２人の研究者は、各自が設定した研究課題の解明にまず着手した。

ただし、テーマとなる地域、時代、ジャンルによって日本及び中国彫刻史（根立及び連携研究者４人〔武笠朗、稲本泰生、松岡久美子、田中健一〈平成２４年度より〉〕、日本近世及び近代絵画・工芸史（連携研究者３人〔安田篤生、宮崎もも、中尾優衣〕）、西洋絵画史（中村、平川及び連携研究者２人〔深谷訓子、劔持あずさ〕）の三班に分かれて、専門領域が近い研究者が議論を重ね、研究をより発展させることを心がけた。こうした各研究者の課題に沿った基礎研究は、毎年の研究会で報告がなされ、本研究の参加者が情報を共有し、日中、東西美術史などの比較研究の問題にも着手できるようにした。なお、最終年度は、３カ年に亘る個別研究を総括するとともに、各参加者の研究成果を論文にまとめ、これらを掲載した報告書を刊行した。

４．研究成果

本研究は、研究代表者、研究分担者、連携分担者が、本研究の趣旨に従い、それぞれ個別テーマを設定し、その解明に従事することを基本とするので、個別研究者ごとの研究成果を記述する。

（１）研究代表者の根立研介は、日本彫刻史の転換期の問題、特に古代から中世への転換期の時期の問題に焦点を当て、研究を行った。この個別研究では、古代と中世の転換期を従来の平安時代末から鎌倉初頭にかけての時期に置くのではなく、平安時代中期ころか中世とみなすことを提唱した。この新たな時期区分によって、彫刻の和様は中世的な様式とみなすことが出来るようになり、また僧綱位を有する仏師の出現も中世的な仏師像であることを明らかにした。

（２）研究分担者の中村俊春は、今日オランダ、ベルギー、ルクセンブルクに相当する地域の美術について、１７世紀以降はフランドル美術およびオランダ美術に区分することが一般的であることに関して、再検討を促す研究を行った。このことは、１７世紀のこの地域の絵画をフランドル絵画とオランダ絵画の二つの流れとして見るか、ネーデルラント絵画として一つの流れとして見るかという問題であるが、そこにはこの地域の複雑な政治的、民族的問題が背景にあることを示唆した。

（３）分担研究者の平川佳世は、デューラー等が現れ活躍した、１５世紀後半から１６世紀前半のドイツ美術の中世から近世の転換期の画家達の評価を、１７世紀後半に活躍したザントラントの著作『ドイツのアカデミー』を通して改めて見直そうとする試みを行った。そして、ザントラントの柔軟な思考法は、多種多様な個人様式が並存する転換期のドイツ美術を俯瞰する上で、今日においても有用なモデルになりえるとした。

（４）連携研究者の武笠朗は、もと興福寺に一具像として伝わり、現在興福寺や奈良国立博物館などに分蔵されている四天王像の制作年代の問題を取り扱った。この四天王像の制作年代については、平安後期十一世紀から鎌倉時代初期１３世紀初めに至る諸説が提唱されているが、武笠は表現や技法などを再検討して、１２世紀後半から１３世紀初めの慶派の手になる可能性を出張した。その見解には説得力があり、今後この四天王像の制作年代を考える上で重要な見解を提唱した。なお、武笠の考察は、根立の行った時期区分の問題と密接に絡むところがあることも注目される。

（５）連携研究者の安田篤生の研究は、江戸時代初期の狩野派を代表する狩野探幽が確立した着色花鳥図の新様式の成立の問題を研究した。この新様式は常信を始めとする後の世代の狩野派の画家に大きな影響を与えただけに、江戸時代の狩野派の画期の問題に繋がる。その成立には、中国絵画の学習の問題が深く関わることなどを明らかにした。

（６）連携研究者の稲本泰生は、近年中国で発掘された南京大報恩寺阿育王塔を取り上げ、この塔に表された仏像の図像と仏頂骨舎利の接点に関わる問題を主に研究した。この研究は、いわゆる唐宋変革期における聖遺物信仰に絡む有益な情報を提示しているが、宋代文化の日本の平安仏教文化への影響の問題にも、新たな情報を提示した点も注目される。

（７）連携研究者の深谷訓子は、ネーデルラント絵画について、現在の美術史における時代区分や時代認識と、ファン・マンデルの著名な『画家の書』のうちの「北方画家列伝」の記載とのずれを検討した。これにより、「北方画家列伝」の時代認識などがより明確になり、また複雑な様相を示すネーデルラント絵画の多様な絵画史の一端を明らかにした。

（８）連携研究者の劔持あずさは、イタリア美術における祭壇画の流れを構造的な観点から考察し、新しいパーラ形式の祭壇画が出現した１５世紀を転換期と捉え、この問題を１４３０年代のアンジェリコ作品を中心に検討を行った。この検討により、１４３０年代の新しい祭壇画形式であったパーラは、画家にとって新しい空間表現を実践する場となっていたことなどを明らかにした。

（９）連携研究者の松岡久美子は、興福寺に伝来し、現在は米国・ボストン美術館の所蔵になっている、１１８９年快慶作の弥勒菩薩像を検討し、この像の革新性を明らかにした。ボストン像の弥勒菩薩像としての図像成立の問題や、来迎表現の初発性など、この弥勒菩薩像が有する鎌倉彫刻史上の注目点を新たな視点から明らかにした。

（１０）連携研究者の宮崎ももは、江戸時代後期の江戸琳派の著名な画家、酒井抱一の仏画を取り上げ、近世の仏画の転換期の問題について検討を加えた。抱一の仏画は、古画を援用しつつ絵画表現としての面白さを求めたところがあり、鑑賞絵画としても楽しめる点があることなどを指摘した。そして、抱一の仏画が、仏画も豊かな創作の場となる近代仏画への転換期の初めに位置づけることが出来ることを明らかにした。

（１１）連携研究者の中尾優衣は、近代日本の漆工品制作の転換期の問題を研究した。日本の漆工芸品は、きわめて長期に亘る伝統を有するが、明治になってこうした伝統の上に西洋美術史の影響が加わり、新たな発展を迎える。この様相を明らかにする展覧会「うるしの近代――京都、〈工芸〉前夜から」を企画し、２０１４年7月に京都国立近代美術館で同展を開催し、その成果を世に問うた。

（１２）連携研究者の田中健一は、８世紀の舎利信仰の問題を検討し、鑑真の舎利及び関連文物の将来を舎利信仰史上の転換期であることに検討を加えた。仏像への舎利納入なども、中国・唐代の影響を受け継ぐものであるが、次代の舎利信仰の前段階を示すもので

あることを明らかにすると共に、舎利信仰が奈良時代の天皇のあり方にも影響を与えていたことを指摘した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２３件）

① 安田篤生、江戸時代における光琳像の変遷について（下―五）―酒井抱一(四)―、愛知教育大学研究報告』（芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編）、査読無、６４輯、２０１５、９－１７
② 深谷訓子、【原典資料研究】カーレル・ファン・マンデル「イタリア画家列伝」－ヴァザーリ以降の画家たちの伝記（１）、京都市立芸術大学美術学部研究紀要、査読無、５９号、２０１５、１９－３２
③ 安田篤生、江戸時代における光琳像の変遷について（下―四）―酒井抱一(三)―、愛知教育大学研究報告』（芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編）、査読無、６３輯、２０１４、１７－２６
④ 宮崎もも、酒井抱一の歌仙絵―抱一のやまと絵学習に注目して、美術フォーラム21、査読有、２９号、２０１４、１０８－１１２
⑤ 根立研介、東大寺鎌倉再興造仏再考―南大門金剛力士像の造像と再興造営理念との関係を中心に―、京都美学美術史学、査読有、１２号、２０１３、１－２６
⑥ 平川佳世、ハンス・フォン・アーヘンの「四大元素」連作―希少性を演出する絵画、京都美学美術史学、査読有、１２号、２０１３、２７－６２
⑦ 武笠朗、鎌倉時代の阿弥陀造像と鎌倉大仏、実践女子大学美学美術史学、査読無、２７号、２０１３、４９－６９
⑧ 稲本泰生、隋唐期東アジアの「優塡王像」受容に関する覚書、東方学報、査読有、８８号、２０１３、１１１－１４９
⑨ 深谷訓子、ネーデルラントの絵画論に見る「記憶」 制作過程におけるその役割、西洋美術研究、査読有、１７号、２０１３、６７－９０
⑩ 中村俊春、対抗宗教改革期の裸体表現批判とルーベンス―芸術的審判のあり方をめぐって、西洋美術研究、査読有、１６号、２０１２、８５－１１０
⑪ 中村俊春、旧ジョセフ・ロビンソン所蔵のヴァン・ダイク作《改悛のマグダラのマリア》、京都美学美術史学、査読有、１１号、２０１２、１９１－２１６
⑫ 安田篤生、江戸時代における光琳像の変遷について（下―三）―酒井抱一(二)―、愛知教育大学研究報告』（芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編）、査読無、６１輯、２０１２、９１－１００
⑬ 剱持あずさ、フィリッポ・リッピとアンドレア・デル・ヴェロッキオ―1460 年代の聖母子像をめぐって―、近畿大学文芸学部論集「文学・芸術・文化」、査読有、２０１２、２４－１号、２８６－３０６
⑭ 田中健一、蒲州大雲寺涅槃変碑像に関する考察、佛教藝術、査読有、３２５号、２０１２、１３－４０
⑮ 田中健一、法隆寺五重塔塔本塑像群の主題構成に関する考察、大阪大谷大学文化財研究、査読無、１２号、２０１２、３６－５７
⑯ 根立研介、興福寺初期再興造仏事業と慶派仏師、京都美学美術史学、査読有、１０号、２０１１、８５－１０４
⑰ 根立研介、日本の仏像の用材樹種の変遷をめぐって、ART LIBRARY、査読無、１２号、２０１１、１１－１７
⑱ 中村俊春、ルーベンス工房のヴァン・ダイク、京都美学美術史学、査読有、１０号、２０１１、３９－８３
⑲ 平川佳世、スプランゲルのイタリア滞在―銅板油彩画の観点から、京都美学美術史学、１査読有、１０号、２０１１、１３３－１６２
⑳ 平川佳世、幻の名画を求めて―16,17 世紀におけるデューラー素描の絵画化、言語文化、査読有、２８号、２０１１、３５－７１
㉒ 松岡久美子、善光寺式阿弥陀三尊における「移」について、京都美学美術史学、査読有、１０号、２０１１、１６３－１８７
㉓ 田中健一、七世紀後半期から八世紀初頭における東アジア舎利信仰関連遺品の比較検討、鹿島美術研究年報、査読有、２８号、２０１１、２３６－２４６

〔学会発表〕（計　９件）

① 稲本泰生、七～八世紀東アジアにおける「優塡王像」の波及－儒仏交渉史上の意義を中心に、2014 年度龍谷大学史学会大会、京都・龍谷大学大宮学舎、２０１４．１０．１７
② 中村俊春、Notes on the Interpretation of Dutch Seventeenth-Century Genre Painting、*Kyoto University and National Taiwan University Symposium 2014*、京都大学、２０１４．９．１
③ 田中健一、The Tachibana Shrine at Hōryū-ji Temple: Design and Adaptation of its Framing Structures、*The International Spring Academy*、東京国立博物館、２０１４．６．１０
④ 根立研介、The Intermediary Son-Style Iconography of the Todai-ji Great South Gate Kongo Rikishi Sculptures、*2013 CIHA Colloquium in NERUTO, Japan*、大塚国際美術館（徳島県鳴門市）、２０１３．１．１６
⑤ 根立研介、室町時代七条仏所の正系仏所

の交代をめぐって、美術史学会西支部例会、京都工芸繊維大学、２０１２.３.１７

⑥ 武笠朗、鎌倉時代の阿弥陀造像―救済と霊験の視点から―、美術史学会東支部大会　シンポジウム「救済と霊験」基調報告、仙台市博物館、２０１１.１２.４

⑦ 中村俊春、 Young Van Dyck as an Imitator of Rubens and His Struggle for Novelty、 *Beijing Forum 2011: The Harmony of Civilizations and Prosperity for All- Tradition and Modernity, Transition and Transformation,* 北京大学、２０１１.１１.６

⑧ 田中健一、山西省大雲寺涅槃変碑像の図像と銘文に関する考察、美術史学会西支部例会、京都大学、２０１１.１１.１９

⑨ 深谷訓子、ディルク・ファン・バビューレン作《キリストの埋葬》の図像源泉と注文主、美術史学会全国大会、同志社大学、２０１１.５.２２

〔図書〕（計　１２件）

① 根立研介・中村俊春・平川佳世・武笠朗・安田篤生・稲本泰生・深谷訓子・劔持あずさ・松岡久美子・宮崎もも・田中健一、京都大学文学研究科、平成２３～２６年度科学研究費補助金　基盤研究（Ｂ）研究代表者　根立研介　研究成果報告書美術史における転換期の諸相』、２０１５、２０６

② 水野敬三郎・根立研介・武笠朗　他、中央公論美術出版、日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代造像銘記篇　第１１巻、２０１５、解説２１３・図版３１７

③ 伊東史朗・武笠朗・根立研介　他、小学館、『密教寺院から平等院へ　（『日本美術全集』第４巻、平安時代Ⅰ）、２０１４、２７６

④ Stephen Bann・根立研介　他、IRSA Pubulishing House,Poland、Between East and West、２０１４、４３６

⑤ 中尾優衣　他、京都国立近代美術館、うるしの近代、２０１４，２７９

⑥ 根立研介、吉川弘文館、ほとけを造った人びと―止利仏師から運慶・快慶まで―、２０１３、２５９

⑦ 根立研介・稲本泰生　他、中央公論美術出版、美術史歴参　百橋明穂先生退職記念検定論文集、２０１３、６５７

⑧ 中村俊春・根立研介・平川佳世・深谷訓子・劔持あずさ・安田篤生・宮崎もも　他、京都大学文学研究科、芸術家と興亡の内と外―学習・共同制作・競争の諸相（平成２１～２４年度科学研究費助成金基盤研究（B）「芸術家と興亡の内と外―学習・共同制作・競争の諸相―」研究成果報告書、２０１３、２６８

⑨ 水野敬三郎・根立研介・武笠朗　他、中央公論美術出版、日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代造像銘記篇　第９巻、２０１３、解説２６４・図版２１３

⑩ 中村俊春　他、毎日新聞社、ルーベンス―栄光のアントワープ工房と原点のイタリア、２０１３、２７２

⑪ 深谷訓子、京都大学学術出版会、ローマの慈愛：「キモンとペロー」の図像表現、２０１２、４０４

⑫ 中村俊春・平川佳世・安田篤生・宮崎もも　他、絵画と史的世界の表象、京都大学学術出版会、２０１２、３８４

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-jah_toppage/

６．研究組織

(1)研究代表者
根立　研介　（NEDACHI,Kensuke）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：10303794

(2)研究分担者
中村　俊春　（NAKAMURA,Toshiharu）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号： 60198223

平川　佳世　（HIRAKAWA,Kayo）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10340762

(3)連携研究者
安田　篤生（YASUDA,Atsuo）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80230217

稲本　泰生（INAMOTO,Yasuo）
京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：70252509

深谷　訓子（FUKAYA,Michiko）
京都市立芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号：30433379

劔持　あずさ（KENMOCHI,Azusa）
近畿大学・文芸学部・講師
研究者番号：40548939

松岡　久美子（MATSUOKA,Kumiko）
龍谷大学・龍谷ミュージアム・講師
研究者番号：10567986

宮崎　もも（MIYAZAKI,Momo）
大和文華館・学芸部・研究員
研究者番号：10416266

中尾　優衣　（NAKAO,Yui）
京都国立近代美術館・学芸部・研究員
研究者番号：00443466

田中　健一（TANAKA,Kenichi）
大阪大谷大学・文学部・講師
研究者番号：00611188